
Home Sweet Home

ミナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Home Sweet Home

【Nコード】

N8501Y

【作者名】

ミナ

【あらすじ】

妻を亡くした直輝と、その家にハウスキーパとして働きに行く女子高生有衣。寂しさを抱えるふたりは、やがて…？

目の前に聳え立つ、一見してすぐにそれとわかる高級マンション。18年と少しのこれまでの人生では、あまりに無縁だったそんな建物に、有衣（ゆい）はかなり気後れしていた。

エレガントなその建物とは対照的に、有衣は腕がもげそうなほど重い買い物袋を下げていたからだ。

今日は月曜日。その袋には、6日分の食料品が詰められるだけ詰まっている。

人手不足で清香（さやか）さんの会社に駆り出されて、のこのこと来てはしまったけれど、本当によかったのだろうか。

こんなマンションに住んでいるなんて、一体どんな人が待っているのか。

柄にもなく不安になっていたが、ガードマンの寄こした視線に慌てて、エントランスへ入っていく。

震える手で3301号室のボタンを押し、インターフォンで呼び出すとすぐに応答があった。

「はい」

やわらかな声だった。

有衣は少しだけ、緊張が和らぐのがわかった。

「あの、KSスタッフの川名（かわな）と申しますが」

「ああ、どうぞ。エレベータの脇でもう一度呼び出してくださいね」

「わかりました」

インターフォンが切れ、代わりにロックが外されたドアが開く。

恐る恐る中へ進むと、エレベータホールがあり、エレベータは6基設置されていた。

下層階、中層階、上層階用、そして上り下りの専用それぞれ分かれているらしい。

31階から上層階用と表示されており、ドアの脇には何かを読み取

るようなパネルと、インタフォン。

そういえばもう一度呼び出して、と言われたのだと思いだして、呼び出す。

「ドアが開いたら乗って、33階へどうぞ。着いたら一番左のドアです」

「わかりました」

少し待っていると、音もなくエレベータのドアが開く。

嚴重なセキュリティの様子に、また少し緊張がぶり返し、不安な気持ちで乗り込んだ。

ゆっくりと上昇する箱の中で有衣は、今から向かう家について頭の中でおさらいしていた。

今まで担当していた坂井（さかい）さんによると、家の主は西岡

直輝さん、30歳、3歳の息子晴基くんがいる。

医師で日曜日以外にはほとんど休みがなく、ハウスキーピングが必要なのは平日と土曜日。

主に必要とされているのは食事と晴基くんの世話、掃除と洗濯はついでで良いらしい。

有衣がこの家に来たのは、その坂井さんが産休を取ることになったからだ。

人手不足に困った清香さんが、ちょうど受験も一区切りついて暇だろうと有衣に話を持ち込んだのである。

夏休みも終盤、確かに暇を持って余していたため、断る理由もなく結局行くことに決まってしまった。

我が母親ながらまったく押し強い人だ、と思いついて小さく溜息をこぼす。

ちょうどそこで目的の階に着いたらしく、上昇が止まって少しだけ浮遊感がした。

エレベータを降りると、ドアは4つしかなかった。

そのドアとドアの間隔は、庶民の有衣からすれば、果てしなく遠かった。

一番左のドアへとかく向かい、今日3度目のインタフォンを鳴らす。

応答はなく、少しの間のと、代わりにドアが開けられた。

出てきたのは、男性にしては色の白い、優しそうな目の人だった。

「川名さん？」

「はい。はじめまして」

「こんにちは！」

有衣の声にかぶるように、大きな声が下のほうから聞こえた。

「あ、こんにちは」

挨拶を返すと、にこにここと満面の笑みを浮かべた小さなかわいい男子の子。

その顔を見て一気に緊張が解けた有衣は、つられてこちらもにこにここと笑顔を返した。

その様子を、直輝が少しだけ驚いたように、眩しそうに見たことは、気づかなかった。

玄関に入るとすぐに、さりげなく重たい荷物が引き受けられ、一瞬戸惑ったが促されるまま中へ入った。

広いリビングに通されてソファを勧められ、落ち着かない気持ちで腰を下ろすと、横に晴基が来る。

「ひろみさんよりも、としした？」

「ひろみさん？」

「こないだまで、きてくれてたの」

「ああ、坂井さん。よりも、年下だよ」

「じゃあ、なにちゃん？」

年下だと、ちゃん付けになるのか。

くりくりとした目で期待を込められて見つめられると、こそばゆい気分になった。

「有衣っていうの」
ガチャンッ。

食器が激しくぶつかる音に、キッチンへ目を向けると、信じられない物を見るような目がこちらを向いていた。
何だろう。何かしただろうか。

急に不安な気持ちに襲われて見つめ返していると、やがてぎこちなく視線は外された。

「ゆいちゃん」

小さな声に、有衣ははっとして晴基に視線を戻す。

「かわいいなまえだね」

「ありがとう」

「うん。あのね、おんなのこになまえをきいたらね、そういうんだって」

そんなかわいい言葉に、不安も忘れて思わず吹き出してしまった。
こんな小さい子に、そんな言葉を教えるなんて、と思うとおかしくてたまらない。

「誰が教えてくれたの？」

「ほいくえんの、たけせんせい」

秘密を教えるように、ひそひそ声で話す晴基はかわいい。

有衣は一人っ子で小さな子どもと接したことはあまりなかったが、子ども独特の温かさが好きだった。

「じゃあ、今度は私に名前を教えてくれるかなあ」

「うん。ぼくね、ハルだよ」

「ハルくん？」

「うん。はるきっていうの。みんなハルってよぶよ」

頷いたところで、お茶を入れたトレイを持った直輝がこちらへ来る。有衣を見る顔は、最初よりもやや強張って見えた。

「ハル、こつちにおいで」

向かい側のソファに腰を下ろした父親に呼ばれ、晴基は素直に従ったが、その表情には不満が表れている。

晴基は有衣をじつと見ながら、しょんぼりとソファに座った。

黙ってお茶を勧め、言いにくそうに直輝は切り出した。

「君は、名前が…」

少しだけ苦しげにも聞こえた声に、有衣は内心首を傾げていた。

先ほどの派手な食器の音を思い出し、そういえば名前を言っていた時ではなかったか、と思いつた。

「あの、川名 有衣ですが。それが何か…」

「唯一のゆい？」

「いえ。有り無しの有に、衣です」

「…そう」

名前が一体どうしたのだろう。漢字まで聞かれるとは。

固く強張った声の調子と、聞かれていることの不自然さに、有衣はもう少しで取り乱しそうだった。

有衣は、顔を俯けてソファに押しつけていた体をもそもぞと動かし、寸でのところで思いとどまったのだ。

しばらくの沈黙のあと聞こえた声は、最初に聞いたやわらかな声に戻っていた。

そっと窺い見た感じからすれば、表情の強張りも解けたように見え、有衣はほっとする。

それから、一週間のスケジュールややるべきことのリストなどを見せてもらい、大まかな内容を頭に入れる。

その後一通り部屋の中を案内された。

書斎として使っている部屋は、掃除もしなくてよい代わりに、入らないでほしいと言われた。

ベッドルームには、大きなベッドと子どもよりの小さなベッドが並べられていた。

ベッドルームという場所に、有衣は奇妙な緊張を覚え、そんな自分が不思議だった。

最後に、出入りが自由にできるようにと、鍵が渡される。

それは見慣れていた銀色のものではなく、ICカードキーで、使い方を説明してもらわねばならなかった。

エントランス、エレベータ、玄関で、それぞれパネルに翳せばよいということらしい。

いったんドアが閉まるとロックされるため、いつでも持ち歩く必要があるということだった。

なんだか別の世界の出来事のような、不思議な感覚を有衣は味わっていた。

「取り急ぎという感じで悪いんだけど。大体の説明はわかってくれたかな」

「あ、はい」

「多分言い忘れないと思うんだけど」

「なまえ！」

晴基の言葉で、思い出したように笑った直輝は、説明を付け加える。

「苗字で呼ぶのはダメなんだ」

「え？」

「君のことを、有衣ちゃんと呼んでもかまわないかな。苗字で呼ぶと、ハルに直されるんだ」

「…もしかして、坂井さんのこともずっと名前で呼んでたんですか？」

「そうなんだよ。ハルはこういふところ頑固で困ってる」

情けなさそうに眉を少し下げた顔に、有衣は思わず笑った。

晴基と同じように、ひろみさん、と呼ぶ姿を想像してしまったからだ。

それと同時に自分が、有衣ちゃん、と呼ばれることを考えると、どこかふわふわとした気分になった。

「それと、呼びづらいだろうから申し訳ないんだけど。俺のことも、苗字では呼ばないでくれるかな」

「えっ？ で、でも…」

「苗字で呼ばれるとハルも反応してしまって、いちいち面倒なんだ。いくら言い聞かせても、ぼくも西岡さんだよ、なんて言っただけで聞かないし」

苦いものを嚙んだような顔で話す直輝のそばで、晴基はそれを気にも留めずにこにこと笑っている。

有衣はなんだかおかしくなってしまうたが、その要求を飲むことにする。

「わかりました。じゃあ、晴基くんはハルくんで、西岡さんは直輝さんで、いいですか？」

「それでいいよ。これからよろしく頼む」

頭を下げられて、有衣も慌てて頭を下げた。

新しいハウスキーパのために、無理に半休を取ったらしい直輝は、説明を終えた後慌てて病院へ出て行った。

別世界みたいなマンションも、妙な質問も、一瞬の強張った表情も、気にはなつたが、

このふたりと、特に晴基と過ごすのは楽しそうだ、と思った有衣は、ここに来てよかったと早くも思った。

01 (後書き)

このお話は、あたたかい雰囲気を目指したいと思います。
どうぞしばらくお付き合いくださいませ。

仕事は夕方から始まる。

まず最初にすることは晴基を保育園に迎えに行くこと。

カメラ付きのインタフォンで到着を告げると、先生が晴基を外に連れてきてくれる。

ここまでしないといけないとは、本当に物騒な世の中になったものだ、初めて来たときには驚いた。

有衣を見つけた晴基の顔は本当にうれしそう、その笑顔を見ると有衣も嬉しくなる。

それから、手をつないで一緒にマンションへ歩いて帰る。

そして、夕食の準備をして一緒に食事し、後片付けも一緒にする。

最初はひとりで片づけていたのだが、一度お皿を運んでもらったら、お手伝いが嬉しいらしいとわかったので、

以来ずっと、運べるものはすべて晴基に運んでもらうことにしている。

お皿一枚、コップ一個、と効率は悪いが、一生懸命運ぶ姿は実に微笑ましい。

「上手に運べたね」

「ありがとうね」

運んでくれるたびにそんな言葉をかけてあげると、晴基は嬉しそうにしてますます一生懸命働いた。

食器を洗っている間、晴基は有衣の足もとで本を広げている。

後片付けが終わると、しばらくはお遊びタイムだ。

晴基がはまっているのは、積み木遊びと、レールの上で電車を走らせる遊びだ。

ひととおり気が済むまで遊んだら、晴基が片づけている間に有衣も手早く掃除し、今度は入浴。

さすがに有衣は入らないが、浴室に一緒に行ってあげてお手伝い。

浴槽に入ったら100まで数えるのが、お風呂でのルールらしい。途中つかえながらも数え上げると、どうだ！とばかりの誇らしげな顔で有衣を見上げる。

そんなひとつひとつの仕草や表情が、有衣にはかわいくてたまらなかつた。

髪にドライヤをかけてあげて、歯磨きを終えた晴基をベッドルームへ連れていく。

晴基の寝つきの良さには、毎回驚かされる。

ベッドに入って、掛け布団をかけてあげると、ものの2、3分で寝息を立て始めるのだ。

眠る前はぐずつく子も多いと聞くが、晴基がそうしたことは一度もなかつた。

有衣はいつも、晴基が眠るとすぐにベッドルームを出ていく。

最初に感じた奇妙な緊張感が、いつまでも抜けないせいだ。

晴基の小さなベッドの隣の、大きなサイズのベッドが否応なしに目に入るせいで、意識せずにいられなくなる。

このマンションで直輝に会ったのは、最初の1回だけなのに、なぜか気になる。

やわらかな声が耳から離れないし、情けなさそうに笑った顔も、なぜか強張った顔も、脳裏に焼き付いている。

それらを振り払うように、部屋の中を点検し、玄関以外の電気を消して部屋を出る。

そうすると、だいたい夜の8時半を過ぎる頃だ。

家に着くのは9時10分過ぎ頃で、まだ会社にいる清香さんに軽い夜食を作ってあげてから、2階に上がる。

清香さんは忙しい人だったから、家事をするのは慣れている。

それにオプシヨンで晴基が付いてきた、というくらいのイメージで、西岡家での仕事は楽しいものだった。

通い始めて2週間、無味だった夏休みが、気づけば充実していた。

いつも通り帰ろうとした時、携帯を持っていないことに気づいた。どこに置いただろうか、とキッチンやリビングを探し回るうちに、ふと写真が目に入る。

たくさん写真たちの中で、ひと際目を引いた2枚の写真。

直輝と、儂げに笑った綺麗なひとの写真、それからそのひととまだ生まれたばかりと思しき晴基の写真だった。

「ハルくんのママだ…」

どうして今まで気づかなかったのだろう、と不思議なくらい際立って見えた。

有衣はなぜだか、目が離せなくなっていた。

と、急に大音量の着うたが流れた。

まるで悪いことをしていたときのように、有衣の体はびくりと揺れる。

音が聞こえたのは、ベッドルームのほうからだった。

これでは眠った晴基が起きてしまう、と慌ててベッドルームへ向かう。

急いで携帯を床から拾い上げ、ボタンを押して音を止める。

晴基は起きていないように見えた。

けれど、不自然なまでに息を詰めている様子が有衣に伝わる。

「ハルくん」

声をかけると、ぴくりと小さく肩が揺れる。

その様子を見て、有衣は自分が小さなころのことを急に思い出した。父親が亡くなった直後、清香さんを心配させまいと、毎晩よく眠れるふりをしたことがある。

本当はショックで眠れなかったのに、寝ないと清香さんが心配するから、だから必死で寝たふりをしていた。

晴基ももしかしたら、そうだったのではないか、と思った。

「ハルくん。音で起きちゃったかな。それとも、さつきからずっと起きてたかな」

怒っている、と思われぬように、優しく静かに話しかけてみることにした。

晴基は反応を返さなかったが、有衣は辛抱強く待つことにする。

やがて晴基は、もそもそと動き出し、寝返りを打って有衣のほうを向いた。

「ゆいちゃん」

「なあに？」

「ぼく、ねてなかったの」

「うん。そっか…」

「おこらない？」

「怒らないよ」

有衣が晴基の頭を撫でてあげると、晴基は照れたように笑った。

それから、不思議そうに有衣の顔を見上げる。

「ゆいちゃん、ぼくがねてなかったの、どうしてしてたの？」

ひろみさんもしらなかつたんだよ。ゆいちゃん、すごいねえ」

「うーん…ハルくんと、おんなじだったから、かな」

「おんなじ？」

意味がわからずとも、“おんなじ”という言葉には惹かれるらしい。

晴基は少しだけ、嬉しそうな顔をした。

「ハルくんにはママがいらないんだよね」

「うん。ママはしゃしんだけなの」

「私にはね、パパがいらないんだ。パパが、写真だけなの」

「パパがいらないの？ ぼく、パパはいるよ。」

ゆいちゃんは、パパがいなくて、かわいそうね…」

晴基の無垢な言葉が、有衣の心に染みた。

片親がいらないという事実は同じなのに、自分にはいる父親が有衣にはいないことがかわいそうだと言う晴基。

「ハルくんは、優しいね」

「やさしいと、うれしい？」

「うん。嬉しいよ」

「じゃあ、いっぱいやさしくなる！」

あのね、ゆいちゃんパパがいなくてかわいそうだからね、ぼくがゆいちゃんのパパになってあげるよ」

「ふふ、ありがとう」

とってもいいことを思いついた！と言わんばかりの口調に、有衣は思わず笑顔になった。

小さい子どもの考えることは、とてつもなく大きい。

でも優しさが嬉しくて、かわいくて、こんな小さなパパができるのもいいかもしれない。

有衣は幸せそうにほほ笑んだ。

「それでね。ゆいちゃんは、ぼくのママになるの」

「えっ？」

そのとんでもない言葉に、有衣の表情は一瞬強張った。

晴基が有衣のパパになる、という言葉とは、持つ意味も重要度も、次元のまったく違うものだったからだ。

「いつもじゃなくていいの。ぼくがおねがいしたら、そのときだけママになって」

それでもけな気に言い募る晴基に、有衣はどうしても頷かざるをえなかった。

多分、晴基は母親がいないという自分の特異性を、保育園という小さな世界だけでも十分に感じているだろう。

その疎外感を、たとえその場しのぎだとしても、少しでも軽くしてあげたいと有衣は思った。

「じゃあ、ハルくん。ひとつだけ約束できるかな」

「なあに？」

「今のお話はね、パパには内緒にするの」

「どうして？」

「うん。パパが悲しくなるかもしれないから。」

ハルくんがパパに秘密にできるなら、それならハルくんがなつてほしいときに、ママになつてあげる」

晴基は、しばらくうーん、と悩んでいたが、やがて笑顔になつて頷いた。

なぜ直輝が悲しくなるのかわからない様子だったが、有衣が承諾したことの嬉しさのほうに勝つたらしかった。

安心したところで眠気が襲ってきたようで、晴基は小さなあくびを何度もする。

それでも、目を閉じたらすぐに有衣がいなくなってしまうと思ひ、近くにあつた有衣の左手をぎゅっと掴んだ。

「ハルくん。ここにいてあげるから、眠くなったら寝てもいいんだよ」

「…うん。いてね。やくそくだよ」

「約束」

すぐにも眠つてしまいそうだったが、それでも晴基の小さな手は有衣の左手を掴んで離さない。

有衣はその小さな手に、余っていた右の手をそつと載せてあげた。

ゆつたりとあやすように、その手を撫でてあげるうちに、晴基はやがて本当に眠りに落ちた。

晴基が眠つて、10分ほど経つた。

いつもならすぐに帰るところだが、今日は帰れないでいた。

晴基の優しさ、内にある寂しさに触れて、しかもここにいてあげる、と約束してしまったから。

せめて直輝が帰ってくるまでは、いてあげなければいけない気がしたのだ。

そういえば、直輝がいつ頃帰ってくるのか、有衣は知らなかった。

いつも晴基がどれほどの時間この部屋でひとりきりで過ごしていたのか、知らなかった。

そして、晴基のことを考えるその片隅で、直輝に会いたいと思つて

いる自分がいることも、否定はできなかつた。

02 (後書き)

今回は、“有衣とハル、心の絆ができる”の巻でした。

ハルは大まじめに言っていました。実際ハルがパパだといろいろ大変そうです…(笑)。

まだひとり蚊帳の外の直輝。

この人が何を考えているのか、早く書きたいな、ということ。次回へ続く！です。

時刻は午後9時半を回っていた。

直輝はタクシーを急いで降り、足早にマンションに入っていく。

晴基が寝た後は、ハウスキーパは帰ることになっている。

そのため晴基が寝てから直輝が帰るまでの間、必然的に晴基はあの部屋にひとりということになる。

自分で出している条件ではあるが、実のところ直輝はそれが心苦しかった。

今はそんなことはなくなったが、最初の頃の晴基は、直輝が帰ると部屋で泣いていたものだ。

それでも今でさえ晴基はたった3歳であり、辛い思いをさせているに違いないのだ。

ただ、あまり遅くまで拘束するとハウスキーパ自体が派遣されないことが多いため、我慢させてしまっている。

ロックを外して玄関のドアを開けると、明るかった。

いつもは玄関の小さな明かりだけがついていてるのだが、今日は廊下もリビングの照明もついている。

消し忘れていったのだろうか、珍しい。

そんなことを思いながら脱いだ靴を仕舞おうと視線を下げると、小さなミニールが目に入った。

ということとは、まだ帰っていないのか。それこそ珍しいことだ。

直輝は、一度だけ会った新しいハウスキーパを思い浮かべた。

初めて部屋に来た時の緊張のかたまり、そして晴基の顔を見て一気にほころばせたその表情。

その劇的な変化の瞬間は、とても眩しく感じた。

年齢を聞いたことはないが、少なくとも自分よりは5つ以上は下だ

ろうと予想している。

若そうに見えるのに、料理はうまく 実のところひろみさんよりうまかったし、仕事はしっかりしている。

あまり重きを置かなくてよいと言った掃除も洗濯も、一通りこなしてくれている。

そして何より、晴基の懐きようが普通でない。

ひろみさんのことも大好きだったようだが、今回はそれ以上、いや比にならないほどだ。

朝食のときも、日曜の休みのときも、ずっとと言ってよいほど一緒に過ごした時間の話をしている。

そのせいで、一度しか会っていないのに、もう何度も会ったような気分になるほどだった。

それにしても、名前には驚いた。

ユイというのは、直輝の亡くなった妻と同じ名前だった。

初めて有衣の名前を聞いた時には思わず動揺してしまったが、今はそのことを少し後悔していた。

よくよく考えてみれば、べつに特別珍しい名前でもないのだから、同じ名前の人がいてもおかしくはない。

それに、あの時、有衣が見せた不安な表情が、直輝の脳裏に焼き付いていた。

幼ささえ感じるような痛々しさのようなものが見えた気がして、自分がひどく悪いことをしたような気になった。

胸が痛んだ、といってもいい。

唯が亡くなった後の直輝の心の動きとしては、それは非常に珍しいことだった。

しかし直輝はまだ、その事実を自覚してはいなかった。

目に入る範囲に有衣の姿はなく、かわりにテーブルの上に盛りつけられたから揚げの皿が載っている。

書斎は入らないように言っているから、有衣がいそうな場所に残りはベッドルームだけだ。

直輝は、自分のベッドルームであるにもかかわらず、なぜか若干の緊張を覚えてうろたえた。

そつとドアを開けると、晴基のベッドのそばに人影。

晴基の手を握りながら、ベッドにもたれかかっているのは。

「ゆ……」

唯、と言いそうになったところで、眩暈に似た感覚に襲われ、直輝は一度目をつぶった。

閉じた瞼の裏で、なぜ唯だと思ったのだろう、と思ったがわからなかった。

もう一度目を開いて同じ光景を見ると、そこにいるのは、確かに有衣だった。

どうしてか起こすのは躊躇われた。

良識的に考えて、帰すべき時間だということはわかってはいたが、直輝はそうしなかった。

晴基の寝顔が、安心しきっているように見えたせいもある。

晴基と、一緒になって眠ってしまった有衣、ふたりの姿にどこか胸が詰まった気がしたせいでもある。

それがどうしてか、直輝はわからなかったし、分析しようとも思わなかった。

とにかく有衣をそのままに、ベッドルームの扉をそつと閉め、直輝はバスルームへ向かった。

かすかに水の音が聞こえ、有衣は身動きした。

はつと意識が覚醒を促し自分がどこにいるのかを理解すると、さつと血の気が引いた。

あのまま晴基と一緒に眠ってしまったのだ。

しかも聞こえてくるこの音は、つまり家の主が帰ってきていること

を示しているに他ならない。

「ばか…！」

小声で自分を罵り、慌てて立ち上がるうとするが、晴基の手がまだしがみついたままだった。

少しかわいそうに思いながらもそつと小さな手を少しずつ剥がしたが、晴基は起きなかった。

ふりではないその眠る様子に安心して、リビングへ向かう。

時計を見ると、もう10時近くだった。

本来ならとうに家にいる時間と、思いの外長く眠っていたらしいことに気づき有衣はぎよつとした。

直輝がいつ帰ってきたのかはわからないが、玄関にあるミュールに気づかないはずはない。

それに、帰ってきてまず晴基を確認しないわけがない。

ということは、一緒になって寝こけていた自分の姿も一緒に見ただろう。

そんな風に簡単に推察できることを思い浮かべ、有衣はつい大きく溜息をついた。

帰らなければと思ったが、勝手に帰るわけにもいかない。

かといって、何もせずにただここで直輝を待つというのもおかしいことだ。

とりあえず清香さんに遅くなりそうだとメールを打ちながら考える。

直輝は食事をしてきたのだろうか。

晴基がひとりで待っていると思えば、仕事の後外で食事はしてこないだろう。

そう思い、ひとまず直輝の食事の準備をすることにする。

器に盛ってあった直輝の分をテーブルから手に取ると、当たり前だが冷めきっている。

今まではずっとレンジで温め直して食べていたのだろう、と思うと

なぜか切ない気持ちになった。

この広い部屋で、ひとりで食事をすることを考えると、寂しい。どうせなのでもう一度揚げ直してしまう。

夜遅いことを考えて大根をおろし、調味料を混ぜてタレを作っただけに仕上げたところで直輝が戻った。

バスルームから出た直輝は、キッチンから聞こえてくる物音に目を瞬いた。

有衣が起きたらしい、と思いながらリビングへ戻ると、キッチンで料理をしている有衣が目に入る。

いつもは自分で温め直している料理を、今日は有衣が温め直してくれているらしい。

キッチンで自分以外の誰かが働く姿を見るのは、かなり久しぶりのことだった。

しかも自分のために、と思うと直輝は素直にうれしかった。

「ありがとう」

カウンタ越しに声をかけると、有衣は少し気まずそうな、はにかんだ顔で振り返った。

「あの、すみません。うつかり寝ちゃって…」

「いや、いいよ。疲れてたんだろう。それより、時間大丈夫かな」

「あ、大丈夫です。メールしたので…」

そこで直輝はふと、誰にメールしたのだろう、と思った。

帰りを心配する誰かが、いるのだということが、引っかけたのだ。そんな自分の反応を初めて認めた直輝は、しばし呆然としてしまった。

テーブルに着いた直輝は、皿の上にあるものがさきほどまでのものと違うのに気付いた。

ただのから揚げだったものの上に、大根おろしと何やらタレが載っている。

この短時間の間に、自分のためにまたアレンジしたのだ、とわかり直輝は驚いた。

「いただきます」

お茶を入れてくれていている有衣に向かって言うと、嬉しそうに笑う。そんな有衣の表情に、あたたかなものを感じながら、直輝は箸を進めた。

直輝が食べ終わるのを待ってから、有衣は少しだけ緊張しながら切り出した。

「あの、ハルくんのことなんですけど」

「ハル？ 何か、悪さしたとか…？」

「いえ違います。やっぱり、少しの時間でもひとりにはできないと思っただんです。」

あの、つまり何が言いたいか、といいますと。

ハルくんが寝付いて、直輝さんが帰ってくるまで、ここで待っててもいいですか？ ということなんですけど」

直輝は、その言葉に驚いて有衣を見つめた。

ずっとそうしてほしかったが言えなかった条件を、有衣のほうから口に出したことが俄かには信じ難かった。

「どうして、そう思うの？」

「実は、今日初めて気づいたんですけど。…ハルくん、寝たふりをしてたんです。」

寝つきがよすぎるな、とは前から思ってたんですけど、ずっと気を遣ってそうしてきたみたいなんです」

それは初めて知った事実だった。

いつからかぱったりと、泣かずにベッドで眠っているようになった晴基。

“ふり”だったのかと思うと、なんてかわいそうなことをしていたのだろう、と胸が潰れそうに痛かった。

そして、それに気づいてくれた有衣のことがとてもありがたく、そ

の温かさが心に染みだ。

「ああ…それで、今日はハルと一緒にいてくれたんだね」

「はい、あの…寝てしまうつもりはなかったんですけど」

しゅん、としてしまった有衣を見て、直輝は吹き出してしまいそうになった。

それでも晴基のことをこんな風に思ってくれているのがわかって、嬉しい気持ちになる。

「それはいいんだ。むしろそんな風に、ハルのことを思ってくれてありがとう。」

有衣ちゃんの提案は、俺としては願ってもないことだけど、決めるのは会社を通してからにしよう」

受け入れてくれそうな雰囲気、有衣はほっとした。

時刻はかなり遅くなっていたが、晴基がいるため直輝が有衣を送ることはできない。

直輝が電話でタクシーをマンションの下に呼び出すのを、有衣は断ろうとしたが直輝は聞かなかった。

有衣はタクシーのお礼を言って、玄関から出ていく。

「それじゃあ…おやすみなさい」

ドアが閉まる間際、“さようなら”の代わりに有衣の口を衝いて出た挨拶。

その言葉が、直輝の中には温かい衝撃としてひろがった。

誰かに、そう言ってもらったのは…もつどれくらいぶりかわからなかった。

「…おやすみ」

ドアが閉まった後の玄関に、有衣の耳には届かなかった直輝の小さな声が響いた。

03 (後書き)

視点がころころ変わるので、読みにくい方いらっしやるかもしれませんが。ごめんなさい。

ハルを軸に、だんだん直輝と有衣が無意識下で近づいてきました。やっぱり、さみしいときには、あたたかいぬくもりが一番効くのですよね。

ちなみに有衣が作ったから揚げにのつけたおろしダレは、大根おろしに、お酢と醤油とみりんと一味とネギが入ったものです。揚げものでもさっぱりいただけただけでお勧めです

夏休みも終わり学校が始まると、一日はものすごく忙しくなった。朝から学校、終わると一度家に戻って制服を脱ぎ、晴基を迎えに行つて、一緒にスーパーへ買い物に行く。

そして夜まで西岡家で過ごし、遅い時間に家に戻って、翌日もその繰り返し。

清香さんも心配するハードな生活だが、有衣は楽しんでいた。むしろのめりこんでいる、と言つてもいいほどだ。

学校のない土曜日さえ、家にいられず午前中から会社でそわそわしだすという筋金入り。

土日だけ清香さんの会社でバイトをしている幼馴染みのみどりにも、それを見られてしまった。

「あんまり深入りしないようにね」
そんなふうには釘を刺されるくらいには、呆れられている。

有衣の提案と直輝のお願いに、清香さんはあっさりうなずいた。

実は自分も昔有衣をひとりにしていたことを、かなり気にしてきたからだ。

有衣がそういう言うのなら、とすぐに了承したのを受け、直輝は何度も頭を下げた。

直輝は料金も上乘せすると言つたが、有衣があまりに固辞するので清香さんがやんわりと断つた。

ただ、そのかわり、直輝は有衣に月曜日のまとめ買いをやめてほしいと注文した。

一番最初に会つた時の、重い荷物を両手からぶら下げてふらついてきた有衣を覚えていたからだ。

月曜日に一気に増える冷蔵庫の中身が、土曜日までにどんどん消えていくのは不思議な楽しみがあつたが、

それでもあの重そうな姿を考えると、ずっと気の毒で仕方がなかった。どうせ必要経費は直輝がすべて出すことになっていいるのだから、とそれだけ頼んだのだ。一回一回買つと割高になると思ったが、あの重さから解放されるのは素直にありがたい、と有衣も了承した。

そんなわけで、今日も晴基と一緒に買い物だ。

「ゆいちゃん、きょうは、なにかう？」

「今日はねえ、かぼちゃが安売りなんだよ」

「かぼちゃ。ぼく、すき」

「ハルくん、チーズも好きだったよね？」

「うん。のびるの」

「じゃ、今日のかぼちゃのグラタンにしよう」

手をつないで店の入口まで歩き、カートに晴基を載せて中へ入った。晴基と一緒にマンションの近くのスーパーに買い物に行くようになって早3週間。

自然と顔なじみになる店員も増えてくるわけで。

入ってすぐの場所にある野菜コーナーへ行くと、よく顔を合わせる店員が近づいてくる。

晴基をかわいがってくれて、よく晴基に声をかけてくれるのだ。

「いらっしやい。今日のごはんは何かな」

「きょうは、かぼちゃのぐらたん！」

「そうかー。ママがお料理上手だといいねえ」

「うん！ なんでもつくれるの」
すっかり親子として認識されていることに、有衣はいつもながら戸惑いを感じる。

いいのだろうか、と思いつつも、晴基が嬉しそうに受け答えするので、つい何も言えずにいた。

店員が晴基と話をしてくれている間に、有衣は特売のかぼちゃと

ほうれんそうを手取る。

カートに放り込むと、店員に挨拶してその場を離れた。

とりあえず、今日必要なものはこれだけだ、とレジへ向かおうとすると、晴基が手をぽんと叩く。

「ゆいちゃん、おかし」

「あ、そっか。今日は土曜だもんね」

嬉しそうにする晴基をかわいいと思いつつ、お菓子のコーナーにカートを進める。

保育園のお友達から、買い物に行くたびに1つだけ好きなものを買ってもらえる、という話を聞いたらしい。

お願いされた有衣は、毎日とはよくないかなと思い、月木土と間を開けながら買ってあげることにしたのだ。

といつても、晴基はいつも100円もしないものばかりを選ぶ。

また遠慮しているのかと思いついてみたが、そうではないという。

どうやら“母親に買ってもらえる”という気分を味わえばそれでいいらしい。

つまり、スーパーにいるときは、晴基が有衣に“ママになってほしいとき”なのだ。

だから有衣はいつでも、内心の戸惑いを晴基の前ではひた隠しにして買い物をした。

戸惑いの理由には別の面もある。

直輝が会社から帰った後、清香さんは意味ありげに有衣を見た。

「有衣もそんな年頃かあ」

「…どんな年頃よ」

意味わかんないんですけど、と小さな声で付け足す。

「え〜？ わかんないならいいわよ」

軽く清香さんは言ったが、本当は有衣にも少しはわかっていた。

西岡家での仕事が楽しいのは、純粹に晴基だけを気にかけているからではないのだ。

それに加えて、夜の遅い時間帯に、直輝と過ごす時間がある。直輝が帰ってきてから食事の用意をし、直輝が食べるのを見ながら他愛もない話をする。

その時間は、あたたかく、有衣の心にすうつと入り込んでくる。そんな状態で、外で晴基の“ママ”を演じるのは、自分にとってよいこととは思えなかった。

みどりに言われたことと、ほぼ大差ないことを清香さんにも言われていた。

「ああいう人は、難しいところあるから。気をつけなさいね」

けれど、気をつけていてもいなくても、結局心の動きには既に抗えなくなっている気がした。

いつかカンチガイな行動に走ってしまいそうで、今の有衣は戸惑いと同時に少しの恐怖を抱えている。

物思いにふけりながら晴基の体の水滴をぬぐっていると、晴基がバスタオルから逃げ出した。

「あつ、こら！ ハルくん！！」

追いかけると、きゃーきゃー言いながら晴基が走って逃げる。

お風呂に入れてあげた後、晴基と追いかっこになるのはいつものことだ。

拭き終わらないうちに逃げるせいで、床にはぼたぼたと落ちた雫で道しるべができる。

ソファの上に行こうとした晴基を、寸でのところで抱きとめた。

「濡れたままソファはダメ！ これ皮なんだから」

「かわってなに？」

「水に濡れちゃいけないもの。もうダメだよ、ハルくん。ちゃんとして拭いて服着なきや」

「はい」

捕まればおとなしくなり、それからは逃げようとはしない。

晴基にとっておそらくゲームの一種なのだが、有衣はほとほと困っ

ていた。

「床の濡れたところ、ハルくんが拭くんだよー」

「わかったー」

でも素直に言うことを聞く晴基には、思わず笑顔が浮かぶ。

ちよつとのわがままくらい、許してあげちゃう気になるのだから、晴基の威力は大きい。

今日は園で遊び疲れていたのか、いつもより早く眠気が襲っていたようだった。

ベッドに入って、晴基の手を握ってあげるとすぐに晴基が眠ったのを見て、有衣は満足げに息をついた。

かわいくて、あたたかくて、いとしい存在だ。

寝顔を見てなごんでいると、聞きなれた電子音とドアの開閉音が聞こえた。

晴基から手を離し、起きないことを確認してから、有衣は直輝を迎えに行った。

「おかえりなさい」

有衣の姿を認めた直輝は、やさしい笑みをこぼした。

「…ただいま。ハルはもう寝ちゃった？」

「はい。なんだか、遊び疲れちゃってたみたいですよ」

「そっか」

土曜日は、直輝の帰りが少しだけ早い。

だからいつもなら、晴基も有衣と一緒に直輝を出迎えるのだ。

直輝の少しだけ残念そうな顔を見て、有衣の心は痛んだ。

それをごまかすように、お風呂を促した。

ちょうどグラタンが焼きあがったところ、直輝がバスルームから戻ってきた。

その濡れた髪から雫が時折ぼたぼたと垂れているのが見えて、有衣はこっさり笑った。

晴基と同じだ、父子ってこんなところまで似るのか、と思ったのだ。そんなことを思われているとは露知らず、直輝はキッチンに入り、冷蔵庫からビールを取り出す。

すると、冷蔵庫の中にジョッキが冷やされているのを見つけて、直輝は驚いた。

「…これ、有衣ちゃんか？」

「あ、今日は土曜日だから…飲むかなと、思って」

直輝の驚いたような顔が目に入り、有衣はなんとなくこそばゆい気分になった。

一緒に過ごしたこれまでで、土曜だけは直輝がビールを飲むことに気づいて、今日は準備してみたのだ。

気づいてもらえたことが、嬉しかった。

「お料理、運びますね」

なんだか恥ずかしさに居たたまれない気持ちになり、有衣は直輝のそばをすり抜けていく。

どこかふわふわした心地で、直輝はテーブルに着いた。

冷蔵庫の中のジョッキを目にした時に感じた何かが、まだじわじわと直輝の中に息づいていた。

そこに、どこかへ行ったと思った有衣が、タオルを手にして戻ってくる。

「あの、髪まだ濡れています…」

タオルを差し出されて、直輝は自分の顔に熱が上るのがわかった。

週に一度、日曜日にだけお風呂に一緒に入る晴基のことを思い出した。

晴基も自分も、大してきちんと拭きもせずに歩きまわっている。

晴基を毎日のお風呂に入れてある有衣には、きっと似ていると思われた、と思うと気恥ずかしかった。

タオルを掴むと、お互いの指先が一瞬触れた。

直輝は内心ぎくりとし、有衣も内心ぎよっとしたが、ふたりとも表

には出さない。

ぎこちなく手が離れて、直輝はタオルで頭を覆った。

触れ合った指先が、熱かった。

04 (後書き)

これぞ、“疑似家族”な感じになってきました。直輝よりも一足先に、有衣の中では恋愛感情が育ってきてる模様です。

ちなみに直輝はまだ無自覚。

しかもそのうえ臆病と鈍感のダブルパンチ^^; ;
どうなることやら、です。

さて、今回のかぼちゃグラタン。

普通のホワイトソースに、味噌をちょびっと入れるのがコツです。具はかぼちゃと玉ねぎと彩りのためにほうれん草。

チーズはたっぷりめで、ばっちりです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8501y/>

Home Sweet Home

2011年11月28日21時45分発行